

『文部省認定社会通信教育20年の歩みと将来』1968年3月（社会通信教育協会）

社会通信教育のビジョン

日本生産性本部プログラム教育研究所長

矢口 新

1. 転換期に立つ通信教育

通信教育というのが、わが国で本格的に考えられ出したのは、最近20年間のことであるとい
ってよい。もちろん既に明治19年から早稲田の高田早苗博士が校外生制度として、通信教授に
よる方法を生み出していることは広く知られており、他にも二、三そういう方式のものがなかつ
たわけではない。日本的な表現で講義録などという言葉も使われていた。これはしかし、通信教
育というものが、わが国の教育の中に、はっきり位置づいていたということではないと見る方が
よさそうである。まだ非常に特殊なことであった。通信による教育も、立派に教育の一つだとい
う自覚がなかったといつてよい。別に法規にこだわるわけではないが、昭和22年3月に公布さ
れた学校教育法には、第45条に「高等学校は通信による教育を行うことができる」と規定され
ている。こういう考え方が成長して来たのは、やはり戦後のことと考える方がよさそうである。

通信教育という教育の形態を確立して行こうという考え方の根底には、民主化という考え方
がある。或は教育の大衆化という言葉に言ってもよいであろう。さまざまな手段方法を採用して、
大衆の教育を考えようという所に、通信による方法というものも本格的にとりあげられるに至っ
たのである。本格的にとりあげるといふことになると、そこにいろいろな教育上の工夫もなされ
るし、体制も整備するということになって来る。そういう営みが20年間行なわれて、さて漸く、
将来の展望を問題にする今の時期に到達したのである。

一方、通信教育にかぎらず、広く教育のさまざまな分野で、現在は多くの課題が発生しつつあ
る。新しい時代が見えて来たことを地盤として、人間の問題、特にその教育の問題が考え直され
なければならないようになって来ている。通信教育もそういう教育の課題とは無縁ではあり得ないの
である。

将来のビジョンを描くということは、通信教育をそれらの全体の教育問題の中に位置づけてみな
なければならないということである。そこに通信教育の新しい使命が考えられるというものである。

2. 学校教育の前提の上に成立って来たが

現実に行なわれている通信教育は、一定の具体的な形態をもっている。通信という手段を使う
としても、無制限にそれを使うのではない。また通信という手段の種類もあらゆるものを使うと
いうようにはなっていない。端的に言えば、教科書を学習者に送りとどけるということを中心と
して成り立っている。学習者はレポートを提出する。これも郵便が使われる。しかしこれ以上に

通信を利用するということは今の所考えられていない。これは現在の時点において考えられている通信教育の現実形態であるが、こういう形態で通信教育が考えられているのも、実は現代の教育の中に生れた歴史的な事実なのである。

それはどういうことかといえば、通信教育の前提として、教育というものの一般的な考え方があるのである。その教育一般についての考え方をつくっているのは、具体的には学校教育の形態である。それをモデルとして、通信教育も考えられているのである。一見全く異った形態として存在している通信教育というものも、その根底には、学校教育の基本的な形態を秘めているのである。それが現在のような通信教育の現実形態を生み出している。

現在教育の基本型、原型として考えられていることは、教育の場は、教師—教材—生徒という関係において成立つということである。この関係をもっと割り切ってしまうと、教師—生徒という関係になると考えられている。つまり教育は教師という人間と生徒という人間との間で行なわれる。人対人の関係において教育は成立する。これが現代の一般常識であろう。

しかし現実はどうだろうか。これはなかなかむづかしい問題だが、学校の教育では、教師—生徒の関係より教材—生徒という関係の方が強くはないか。その関係の真中に教師が介入するのである。これは言いかえれば、現実の教育において力を発揮しているのは教科書であって、教師はその教科書の解説者としての役割しか果たしていない。こういうようにも考えられる。これは現実の問題としては、いろいろな場合が存在するとも考えられるので一概には言えないことである。

ともかく、教育は、教師・教材・生徒の三者で成立つという地盤の上で、通信教育が成立つのである。そして通信教育はその教材を生徒に通信という手段で送りどける。教師はこの場合欠如している。だから教育の基本型から言えば、通信教育は欠如態であるということになる。しかしその欠如したものを補うものとして、また通信による解説書の送付とか、生徒のレポートの提出とかが考えられている。しかしそれでもまだ教師—生徒の関係は欠如しているからスクーリングという方法を考える。こうして、どこまでも、教育の原型、基本型に近寄る方向をみせながら、通信教育という形態を維持して行こうと考えている。つまり通信教育は学校教育の形態の上のってつくられた教育の形態だということになるであろう。

3. 通信教育は欠如態なのか

通信教育は学校教育の欠如態としてあると考えれば、それは教育においてエースではない。救助投手である。救援投手である。二番手であって一番手ではない。二番手が登場して役割を果たしたのはどういう理由によるかといえば、それは教育の民主化、大衆化の線である。戦後の教育の民主化、大衆化の至上命令が、ともかくあらゆる手段を採用して、教育を行うという路線を設けたのである。そういう状況下において、通信教育が教育の中に登場し、おのれの欠如態を自覚しつつも、しかもそういう教育によって、教育の世界に引きあげるべき教育対象を網にかけることができた。その意味で、通信教育は、極めて有意義な網としての役割を果たしてきたのである。

この欠如態としての教育でありながらも有効な社会的役割を果たしているという通信教育のあり方は、現在までのところ、通信教育の基本的な性格であるかのように思われている。所がこ

の基本的性格づけは、動かすべからざるものであろうか。現在の或は未来に向かつての教育の考え方は、これまで述べたような考え方を根本的にくつがえすような方向に動いている。その中で通信教育もまったく異なった基盤から考え直さなければならなくなっている。そしてそれは、通信教育というような言葉の使い方にも変更を求める如きものであると思う。そういう未来に向かつての教育の考え方、つまり教育観を問題にしないでは、通信教育の将来ビジョンを語ることはできないであろう。その点を次に問題にしてみよう。

4. 現代学習観の根底にあるもの

さきに現代の学習の場を構成する三つの要素を教師—教材—生徒という形であげた。この三つのうち、場合によっては教師に重点がおかれるときもあり、教材に重点を置くときもあるということも述べた。そのいずれにしても、こういう常識の根底には、もう一つかくされた考え方があるのである。それは、どの場合も、生徒が受身の立場におかれているということである。教師—教材—生徒という現代の常識化したこの学習の場の構造は、それがどういうところに重点がおかれようと、結局は、生徒が、教材—つまり教科書の中味を受け入れるという考え方を前提としている。教師が力を発揮するべきだという考え方でも、主流としての考え方は教師の話を生徒がうけ入れるということであると考えるべきといえる。

教師の話というのは、つまり教科書の内容にあたるのである。ただそれが文字であらわされたのが教科書であるに対して、教師の話は、音声言語が中心であるというだけのことである。もちろん教師は生きものであるから、その話も、決して教科書のように無味乾燥ではない。もっとニュアンスをもち、さまざまな内容を含んでいる。しかし基本的に重視されていることは、教科書の解説としての意味をもった話なのである。そして結局、生徒はそれを受け入れるものという立場で考えられている。

知識を与えるというような言葉が教育ではいつも使われる。これは一体どういうことか考えるとおかしな言葉である。金を人に与えるといえば、その金が自分の所から人に移動する。知識というようなものについても、そういうことを考えているのだろうか。知識という形のないものについて与えるというような言葉を使って考えている所に、一種の人間観があらわれている。与えられる人間は受けとるのである。受けとるといえるのはどういうことかは本当はよくわからないが、やはり金を与えて受けとるといふのと類似的に考えているのであろう。知識というものが、与える人から与えられる人に移動すると考えているのであろう。ただし知識は人に与えても、与えた人からなくなることはないが、しかしこういう与えるという言葉を使う根底には、それが「もの」的に考えられて、受けとる人にうつるというように考えられているのではないか。そうはつきり自覚されているということではないかも知れない。いな考えるとわからなくなるといった方が正しいかも知れない。しかし理くつの世界でなく、実際の行動面ではそういう考え方にちかいはないだろうか。こういう考え方は、人間の問題として考えてみると、人間は知識の入れものという感覚であるといえよう。人間容器観という強すぎるが、感覚としてはそういう考え方である。そういう考え方は、結局生徒を受身にするのである。生徒はものをおぼえる—それはつまり

知識を受け入れる。頭の中へ入れる、心、精神がそれを受け入れる、というような感覚である。記憶するというのも、そのような感覚である。心のたんすにものをしまいこむという考え方である。

5. 新しい人間観と学習観

かなり長い間、教育の新しい思潮として児童、生徒を中心に考えようということが言われて来た。教師中心、教科書中心ということに対して、生徒中心、児童中心の教育ということが言われて来た。この思想はさまざまな含みをもっているけれども、結局これまでは教育改革の極め手にはなっていない。それは何故かということ、現代教育の根底にある人間容器観をやぶるような考え方が出て来ないからである。しかし漸く、脳科学の方から人間容器観に対する反証があがって来ている。それはいわば人間システム観とも言うべき考え方である。

人間の脳系（神経系）は大脳中枢の150億の細胞を中心として全身に配付されて網の目のようになっているが、これはいわば自動制御システムのようなものだと考えてよい。もちろん人間のつくり出した自動制御システムと全くおなじだという意味ではない。それは生きているという点でちがっている。生きているということは、それ自体がどんどん機能を拡充して行くことである。だがその様相は極めてよく似ている。たとえば、赤ん坊を考えて見よう。生れたばかりの赤ん坊は、時間が来ておなかがすくと、オギャオギャと泣く。もちろんそれは母親が推察するのである。赤ん坊はおなかがすいたとはいわない。しかしこの推察は間違っていない。母親がオッパイを与えると、それに吸いついて、おいしそうにのむ。おいしそうにということも、こちらの推理で、一種の感情移入である。やがてお腹がいっぱいになるとオッパイをはなし、目をつぶって眠ってしまう。これは自動制御的に考えるのが、最も合理的、科学的な解釈であろう。他に解釈のしようがないのである。

この考え方には抵抗があろう。その有力なものは、人間が心、精神をもつ存在だという思想であろう。人間の人間たる所以は、心、精神という人間の支配者があって、それが人間を動かしている。心の支配のもとに人間は行動しているという考え方である。しかし果してそうであろうか。心、精神という自覚的な主体者というものが赤ん坊にもあると考えてよいのだろうか。別な例で考えてみよう。私が立っているとき、誰かに私のうしろから足へ針をさしたとする。私はとびあがる。それを私は、痛いからとび上ったと説明する。しかし果してそうであろうか。とび上ると同時に痛さを感じたという方が正しいのではないか。それは神経の働きではないか。私は痛いと感じて、足をあげたのではなく、足はあがった、そして痛みを感じたのである。それを支配しているのは私の心でなく、脳系の自動制御的システムである。もう一つ例をあげてみよう。若し左足をあげて立っているとき、右足を針でさされたらどうであろうか。決して右足をあげることはしない。しかしそれは右足をあげたら倒れてしまうから、あげないでおこうと考えて、右足をあげないのではなく、脳系の自動制御的システムによってそうなのである。これらのことは実験的にも説明済みなのである。つまり神経系のはたらきが、そういう風にできあがって居て、別に心で考えてやっているわけではない。こう考えると、これは考える心の働きではなく、脳系の働き

であるというべきであろう。考えない心というならば、それは矛盾であるか、或は脳系イコール心ということになってしまう。

こういう感覚神経より更に奥深い所では、いわゆる自律神経というものがあって、心の支配の全くとどかないものがある。汗をかくなどということを考えてみるとよい。汗はかこうと思ってかくことはできないが、暑ければ、ひとりで汗をかいて体温を調節してくれるようになっている。こういう神経系の働きは、われわれの内臓の部分には数多くあって、われわれの意識のとどかない所で実は人間の生命を維持しているのである。人間の生命を維持しているのはこういう脳系であり、その支配において、われわれは行動している。

こういう脳系の働きは、生れながらそなわっているもののみでなく、生れてからどんどんその働きを拡充して行くのである。人間自動制御システムは、生れてからどんどん働きをおぼえるのである。つまり神経系の働きの回路がどんどんふえると考えたらよいのである。こういう所に人間の神秘的な所があるのであるが、150億の細胞がその働きをふやして行くのだと考えたらよい。赤ん坊の例をもう一度出すと、赤ん坊が一度だかされると、すぐ抱きぐせがつくという。一度だいてオッパイを吞ませると二度目からすぐオッパイの方へくびをむけるという。こういう不思議な力をもっている。これが生きていくということである。つまり脳系がものをおぼえるのである。ものに反応する仕方をおぼえるのである。それは草木が太陽の光に反応してそちらの方へ向くのとおなじかも知れない。

われわれがダンスをおぼえる。おぼえるときは、くりかえしくりかえし練習をする。つまり何度もステップをふむという行動をする。つまり神経系を働かして足を動かすのである。しかしおぼえてしまうと、もう全然どうステップをふむかということを考えないで、ひとりで足は動く。つまり身体がおぼえたのであるが、本当は脳系がおぼえたというべきであろう。おどるとき、心で次のステップはなどと考えるてはいない。自然に足は動いているのである。おぼえるのは、脳系が働き方をおぼえるのであって、心の中に何かがあるというようなことはない。脳系の回答ができるのだといった方が正しいのである。人間は通信機に近いのである。

6. 人間が知識をもつとはどういうことか

話が人間のことになって、脇道へそれた感があるがもう少し語っておかなくてはならない。人間についての考え方が逆転して、そこから教育の考え方がかわって来たのである。人間は知識のいれものではないという点をもう少し考えてみなくてはならぬ。人間は言語をもつ点で他の動物とちがうといわれる。他の動物が全く言語をもたないかどうかはともかくとして、言葉というのは動物的感覚でとらえたものを音の符号として再現する。それは耳から入る音の符号として、神経系の上を走る。第二信号系などといわれる。この伝わり方も、他の感覚器に刺戟があったのと本質的にはかわりがない。梅干をたべればつばが出る。それを音の符号で聞いてもつばが出るというようなものである。

言葉が使われはじめるやいなや、人間は外界を細かく分析する。分析されたものを関連づける。総合するといってもよい。感覚の世界では水を吞むというのは一つの事実であるが、言葉が生れ

るや否や、水はコップの中の水であり、それを手でもち、自分がのむというように、一つの未分化の世界は無限にといいてよい程細かく分析されて来る。そこに知識が成立する。つまり知識とは外界を感覚でとらえ、それを言語で表現し、それによって分析と総合の働きをする回路が出来上ることを意味するのである。その働きが脳系にできあがったとき、知識をもったというのである。知識はものの如く人間の外にあるものでなく、人間の脳系の働きとしてあるのである。言語の信号系によって、ものを分析し、その関連をつける脳系が回路として存在することを意味するのである。その回路は、ものにふれ、それを言語の符号で表現し、その関連をつけるという脳系のはたらきを通じてつくられる。そのはたらきは、ダンスをおぼえるとおなじように、やはりくりかえしくりかえし練習することによってつくられるというのが原則である。知識はいれものに入れられるものではない。人間はそれを入れる器ではなく、むしろ外界を測定し、それに反応する信号回路である。外界に反応するというのはそれを言語で符号化し、その分析したものを組み合わせ、一つの事実を再構成するという働きであるといつてよい。外界の自己化などという言い方をしてみてもよい。

心とか精神というのもそういう知識なのである。つまり人間が自身の働きを分析し関連づけて説明して来た所から生み出されたものである。そういうものがあるのではなく、考えられたものである。昔から人間は不思議な力をもったものとしてみられて来た。古代人はそれを魔力をもった魂の働きと考えた。現代もまだその影響が残っているとは言えないか。心的機能、精神的機能としてはたらきをあらわしたものと考えるべき言葉が、いつの間にか実体として考えられているのである。

心というもの、精神というものがあるのではない。それは人間の脳系の働き、言語信号系の働きをあらわした言葉にすぎない。その働きは複雑である。それを心とか精神とかという言葉にかぶせてしまうと、心、精神がいつの間にか魔力をもった存在のように考えられて来るのである。

7. 能力を育てる学習への道

人間のことを詳しく述べすぎたと思われるかも知れない。しかしこういう脳科学にもとづいた人間観が、教育の考え方を逆転しつつある。人間は知識をいれる容器ではなく、行動によって脳系の反射機能を拡充する機能的存在なのである。そこで機能を拡充するには行動をする。脳系を働かすということが根本の問題となるのである。別な表現をしたら、人間のもっている神経系、脳系を働かして、外界を測定し、その測定に応じて外界に反射的行動をする。或るときは身体的に、或る時は言語の信号系によって。例えば、誰かを見て、山田君と呼んだとする。これは山田君とよばれた人を測定して、他の人と区別し、それを言語で表現したのである。人間の行動はこういう測定と表現の連続であるといつてよい。科学はその測定が精密になったものであるが、日常の活動も広い意味で、外界を測定しては反応しているのである。そういう機能を人間が拡充して行くのが学習であり教育である。

さてこう考えると、教育、学習で中心になるのは、教師でも、教材でもなく、生徒の測定活動であり反応表現活動である。なんらかの対象に対して行動するということである。教材は、従来

の意味でおぼえるものとしてあるのではなく、測定し、そして表現行動をする対象としてあるものでなければならない。それは生徒にどういう行動力（反射活動力といってもよい、測定—表現能力といってもよい）を身につけさせるかということから発成されなければならない。知識として、誰かがあることについて知っていることを話したり、書いたりして与えるというものではない。あることをどう測定し、どう組み立てるかという行動力を身につけさせるために、あること自体が提示され、それを生徒が自ら知識として組み立てて行くのである。従来の教科書にあることは、教科書の著者が自分で組み立てたことである。そういう結果を与えるのではなく、著者がなしたような知識を組み立てる能力を養うために、組み立てる行動自体を生徒にやらせるのである。ここに生徒に提示されるものの性格が全くかわって来なくてはならない。

8. 教材観の方向転換—通信教材とは何か

生徒に行動させることが大切であり、そういう行動の対象となるべき教材を提示するということは、言いかえると、教育は本質的な意味で自己教育であるということの上に教育を考えるということである。

現在こういう考え方の上に立って行動力の形成のさまざまな研究が行なわれ、その上に、学習のプロセスが考え直されて来ている。これがプログラム方式といわれるものである。これは、これまで述べて来たように、単なる方法上の問題でなく、根本的な考え方、人間観の根底から旧来の考え方とちがった考え方をとるものである。従って、学習のシステム全体系を大きくゆり動かすものとなって来ている。

従来の教育観が、教師—生徒集団というシステムを成立させたのに対して、新しい教育観は、生徒の行動を中心として、個別的なシステムをつくりあげつつある。それは個別の生徒に対する行動対象—行動—フィードバック回路という体系の複合としての学習システムである。現在この体系をつくるための努力は世界各国とも大わらわになっている。それは具体的には、生徒に従来与えられたテキストにかわって、全く異った体系のものとしてのプログラムテキストという形のものもあり、いわゆるティーチング・マシンといわれるコンピュータを利用して視聴覚教具を総合したものもある。これらはまだどれも未完成であるが、ここ十年間の間には全く異った学習システムを生み出すものとなることは疑い得ないものとなりつつある。

この方向の営みが生み出すものは結局何かといえば、生徒一人一人に対して生徒の行動を促す教材が与えられ、それを中心として学習が進むということである。しかしもちろんそれは生徒に孤独の学習を強いるということではない。一人一人の行動の能力形成の上に、集団の協同も改めて考え直されるということである。ここには新たな教育の編成が生れるであろう。

ここまで考えて来ると、通信教育は、自分自身を見直さなくてはならない。通信によって、教材を一人一人に送付するということは、通信教育の特色であると考えられたが、これからの教育は、一人一人に対して教材を提示し行動を要求するのが当然なのである。郵便であろうがなかろうがそんなことは問題ではない。場合によっては、ラジオでも、テレビでも使うがよい。テキストは皆一人一人が行動し、学習するものとして作られて来る。ラジオやテレビとテキストとの結

合も考えられてよい。様々な結びつきがあってよい。生徒が学校で学習するか、家庭で学習するかは余り関係のないことである。いついかなる学習の場でも、行動すること、それに対してフィードバックすることが考えられなくてはならぬ。テキストであろうが、ラジオであろうが、テレビであろうが、或はその組合せであろうが、常にフィードバックの工夫がなされなくてはならぬ。コンピュータを利用して、それが何千、何万という生徒に対して可能になれば、教育の全体系は更に大きく変化するであろう。

通信教育の通信という看板は意味を失ったと考えてもよい。或は、それが全ての教育に共通の事柄となったというように考えてよい。

9. 教育の本質は自己学習—通信教材は欠如態ではない

自学であるということは教育としての欠如態と考えられて来た通信教育の劣等感は今も消滅してもよいのである。学校においても自学を基本として教育の体制を考え直している時代なのである。これまでのような考え方でスクーリングをして通信教育の欠を補うという考え方は捨てなければならない。教師の役目は、自学の体制の上に生徒一人一人のカウンセリングをすることである。コンピュータを利用する学習体制が開発されれば、生徒の学習の記録は精細にとられて、その記録の上にカウンセリングはより充実したものになろう。生徒がいかなる学習を積み重ねるべきかも教師は相談してやることになる。それが本当のカウンセリングである。コンピュータは学校の中だけで使われるのではなく、その通信網は家庭にまでのびるであろうから、そうなるとこれまで学校教育と通信教育というように区別していた形の上の差は何もなくなってしまうのではないか。通信教育は教育の裏街道ではないのである。このことが通信教育の将来のビジョンを最も大きく規定するのである。

10. 独自の教材開発が必要である

これまで通信教科書ないし通信教材といわれるものは、正直の所、学校で使われる教科書、教材のそのままであったり、二番せんじであったりしているのである。学校で教師が解説すべきものを使っているという所に通信教育の劣等感が生じる根本の原因がある。学校の教科書は、教師の説明を聞いてもよくわからないものが多い。それを1人で読んでどうしてわかるであろうか。学習書と称するもの解説書というものがこれまた、教科書の形態を脱却することができないでいる。わからないものが二重に重なっている。それでは自学自習の教育という課題を解脱することができないのである。

学校で教師が居て学習をする場合にも、プログラム化された教科書を考えて行こうとしている時代に、通信教育の分野を担当するものが、新しい教材を開発しないで行っているのは、時代錯誤といわれても仕方がないのである。教材の開発、新しい学習システムにもとづいて、これまでと異った教材を開発して、これを生徒に送りこむということは、通信教育にたずさわるものの責任である。本当の意味で、自学する学習者に送りこむ教材を開発することが通信教育者の責任なのであ

る。そのことがなければ、結果において、現在の通信教育の担当者は没落するであろう。本質的なそういう仕事をする新しい担当者にとってかわられるということである。

11. 無限の対象が通信教材を待っている

最近社会教育で生涯教育などということが言われている。何も社会教育の分野だけの問題でなく、本来人間は、一生涯学習し自ら教育をして行くべきものである。学校だけが教育の機関である、学生時代が学習の時代だという考え方は、教育について誤った考え方であることは言うまでもない。しかしこのことがあらためて言われているのは、これまでの教育を考え直す上で大きな意味はある。一生涯が教育であるから、それぞれの人に、それぞれの学習時代にふさわしい教材が与えられなければならないのである。

学校教育が教育の殆んどすべてであったときは、生活に入る前に、生涯の教育をすべて与えようという考え方となる。つまり学校時代に学校卒業後30年40年という生活に必要な教育をすべて準備しようという誤った教育を生み出して来た。これが学歴主義ともつながっているのである。そこに奇妙な観念的な教育内容が考えられ、ゆがんだ教科書が生れて来る。通信教育がそれを学習者に送りこんでいるのでは、到底発展し得ない。

最近企業の中で教育が活発になって来たが、そういう場所の教育が次第にプログラム化されたテキストによって行なわれる方向にかわりつつある。企業人はそれぞれ現在の生活に応じて能力を開発しようと学習しているのである。そういう人々にこたえる教材は、学校教材の二番せじでなく新しく開発されなくてはなるまい。社会通信教育が発展する方向にあるのはそういう方向であるが、それにはこれまでの通信教材観を根本的に改めなくてはならない。新しい教材の分野を新しい方式で開発することは、通信教育担当者の責任である。その開発分野は無限に広い。

しかしこの教材開発は、従来の教科書作製とは全く体制を異にするであろう。著者が自分の知っていることを教科書に書くなどということではない。それは学習のシステムを設計することなのである。学習者にどのような行動対象を提示し、どのような反応を求めるかを設計するのである。これは大変な仕事である。今はやりの言葉で言えばビッグサイエンス的な仕事なのである。

そういう体制を成立させるには、社会通信教育協会は、教材開発センターでもつくって、将来の日本の社会教育の全教材を開発するという覚悟をすべきではないだろうか。それが教育財団としての責任と義務でもあると思われる。